

平城宮斜行溝 SD8600 出土の土器

1 はじめに

考古第二研究室では土器基準資料の再整理作業を継続的に進めている。本報告では、奈良時代初頭の良好な土器群である平城宮東院西辺地区斜行溝SD8600出土土器について報告する。

本資料については、既に川越俊一らにより検討がおこなわれており、奈良時代前半期の土器様相の変遷の概略と大別の見直しに関する見通しが示されている¹⁾。これらの報告では紙幅の制約上、各資料の詳細を提示できていなかったため、今回報告するものである。

2 SD8600の概要と出土層位

SD8600は平城第104次調査で検出された斜行溝である。平城宮造営直後のA-1期の遺構であり、溝中層・上層から和銅年間の紀年木簡が出土した(『1977平城概報』、『平城木簡概報12』)。SD8600の埋土は、溝機能時の堆積層である白色砂層(下層)、灰色砂層(中層)と溝機能が低下し滞留を想起させる灰黒色粘質土層・黄灰色砂層(上層)および埋立土である木屑層・明灰褐色粘土層・灰白色粘土層(最上層)の大きく4層に分かれる。各土器の出土層位については表49に示し、SD8600から出土した土器をまとめて記述する²⁾。

3 SD8600出土土器の概要

土 師 器

土師器は多様な器種があり、供膳具類では暗文を施す精製の杯・皿類が多くみられる一方、粗製の杯類が一定量存在する点が特徴的である。

杯A (1~30) 口径に大小の法量分化がみられる。口縁部内面の暗文構成は、①二段放射暗文(1~11・26・27)、②一段放射暗文と連弧暗文(13~22・28・29)、③一段放射暗文(12・25)の3群がある³⁾。①には褐色を呈し胎土に白色微砂を多く含む一群(1~3・7・8・10・11)と橙褐色を呈する一群(5・6・9)があり、前者は口縁部が緩やかに外方へ延びる特徴が、後者は口縁部が直線的に開き端部の巻き込みが弱い特徴がある。小型

の一群(26・27)は灰白色を呈し、口縁端部の巻き込みが弱く、上段の放射暗文が口縁端部まで達する特徴がある。また、①の暗文構成には上段の暗文帯幅が広い一群(2~8)と狭い一群(1・9~11)とがある。②には褐色を呈し胎土に白色微砂を含む一群(16~20)と橙褐色系の色調を呈し白色微砂を多く含む一群(13~15)がある。連弧暗文に注目すると、弧線間がループする一群(14~21・28・29)と弧線が連続する文字通りの連弧となる一群(13・22)があり前者が多い。③は少数にとどまる。また、内面に暗文をもたない23・24は器壁が厚く、異質である。30は壺蓋の可能性がある。なお、28はスヌが付着し、灯明器として転用する。

杯B (72~83) 杯Aと同様、口径に大小の法量分化がみられ、口縁部内面の暗文構成には①(72~74・77)と②(75・76・79)の2群がある。また、77は二段放射暗文の上段と下段の間に連弧暗文を施す。口縁部上位が外反する形態(72・74~76)と、口縁部が直線的に立ち上がる形態(73・77・79)がある。高台を底部縁辺に貼り付けるが、その断面形態は多様である。

杯C (31~46) 口径に大小の法量分化がみられ、口径の小さな一群(31~36)は外面の調整を省略する傾向がある。口縁部内面の暗文構成は②一段放射暗文と連弧暗文(42~46)、③一段放射暗文(31~34・37~41)の2群がある。②の連弧暗文には杯Aと同様、ループする一群(42~44・46)と連弧(45)とがある。②のうち40は左上がりの暗文である。また35・36は内面に暗文を施していないが、形態と胎土からみて無暗文の杯Cとした。35は灯明器として転用する。36は内面に、41は外面に焼成後のヘラ書きがある。

杯D (51~53) 鉢Bとも分類される器種である。平底の底部から口縁部が内湾しつつ立ち上がる。外面にヘラミガキを施し、内面に暗文はない。

杯E (54~58) 55は把手を貼り付けたナデ調整の痕跡が残る。外面のヘラミガキはみられない。56は外面にヘラミガキを施した後、内外面に漆を塗布する。金属器の質感の再現を意図したものであろう。58は器壁が厚く、深い形態となる。

粗製杯 (110~138) 従来、平城地域の土器の器種分類において碗Cや杯X・碗X、飛鳥・藤原地域で杯Gとして分類されている器種⁴⁾を粗製杯と一括して記述する。

表49 SD8600出土土器の層位

出土層位 (括弧内は取り上げ層位名)	土師器	須恵器
最上層 (埋立土)	6・7・9・12・13・14・18・35・48・50・61・72・83・91・101・104・112・117・120・122・125・127・137・153・157・180・181・190・200	204・215・271・282・292・306
上層 (灰黒色粘質土・黃灰色砂)	1・3・4・7・8・9・10・11・12・15・16・17・19・20・21・22・23・24・25・29・30・33・34・38・41・42・43・44・45・46・52・57・58・59・60・62・63・64・65・66・68・69・70・71・73・74・76・79・80・82・84・88・89・90・92・93・94・95・97・98・99・100・101・102・106・111・112・115・116・119・123・124・128・130・131・132・133・134・136・138・141・142・144・145・146・147・148・149・151・154・156・159・160・161・162・165・167・168・170・171・172・175・176・177・178・179・180・183・184・185・186・193・195・199・201	205・206・207・208・209・210・213・215・216・217・218・219・220・221・223・224・225・226・228・229・231・232・236・237・238・240・241・242・245・246・247・248・249・250・253・254・257・258・259・260・264・267・269・270・272・274・276・280・283・285・286・288・289・293・296・298・300・304・306
中層 (灰色砂)	4・26・32・40・41・49・51・53・55・67・68・73・76・79・86・96・107・109・110・121・135・138・152・155・158・163・164・173・174・182・189	211・212・214・222・227・230・233・235・239・243・252・255・261・262・268・269・273・275・278・282・285・287・293・295・301・305
下層 (白色砂)	78・137	
その他 (シガラミ周辺・斜行溝肩)	28・85・113・126・129・169・188・192・197・198	244・266・279・281・291・295・302・303
SD3236合流点	2・5・27・31・37・47・75	234・256・263・277
層位不明 (斜行溝)	36・39・54・56・77・81・87・103・105・108・114・118・139・140・143・150・166・187・191・194・196	202・203・251・265・271・284・287・290・294・297・299

(数字は図番号に対応する。層位間で接合したものは各層に記載した。)

いずれも粘土紐を巻き上げ、口縁部に横ナデを施す。底部外面に軽いナデ調整を施すものもあるが、指オサエなど成型時の痕跡をとどめるものが多い。内面に暗文は施さない。

粗製杯を形態や胎土から大きく4群に分類する。I (112・115・118・120・121・125~129)：口縁部の横ナデが強く直立気味となり、端部に段をもつ。胎土に砂礫を多く含む。II (130~134)：底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部内面に凹線状の段をもつ。器壁が薄く、精良な胎土である。III (111・114・117・135)：底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部外面に面を持つ。胎土に白色微砂をやや多く含む。IV：I~IIIに属さない。Iは平城地域で碗Cと分類されてきたもので、深い形態(112)と浅い形態(115・118・120・121・125~129)がある。内面に板ナデの痕跡を残すものも多い。IIは杯Cの43と胎土・細部形態の特徴が共通し、無暗文の杯Cともいえる。IIIは飛鳥・藤原地域で杯Gcと分類されるものと形態的特徴が似る⁵⁾。数量的には少ない。IVはさらに細別が可能であり、口縁部が外反し、胎土に砂が多く混じるもの(119)や、赤褐色を呈し白色微砂を含むもの(122・124)、口縁端部が内傾し橙褐色を呈するもの(123)がある。また、底部外面にヘラケズリを施す136~138は、藤原宮SD2300出土土器の報告で杯Zと仮称された一群と共通する⁶⁾。なお、119は内面に線刻が、136は内面に墨痕がある。

皿A (47~50、91~109) 口径に大小の法量分化がみられる。小型の一群(47~50)では外面にヘラミガキを施すもの(47)とa0手法のもの(48~50)がある。49は無暗文である。48・50はともに灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む点、口縁端部に面を持つ点が共通する。91~105・109は、口径が20~23cmの間にまとまる。外面の調整手法はa0手法が主体である。109は底部外面に対し、焼成後に格子状の記号をヘラ書きする。94は灯明器として転用しており、96は内面に黒色の付着物が点在する。また106は内外面にヘラミガキを施し、内面のみを黒色に燻す。

皿B (84~89) 全形を復元できる事例が少ないものの、大小の法量分化がみられる。高台の形態が多様であるが、底部縁辺に低い高台を貼り付ける一群(84・85・87・88)と底部内寄りにやや高い高台を貼り付けるもの(86)がある。

皿C (90) 小型の皿で口縁部が外反する。

皿X (139) 粗製の皿で、口縁端部に段をもつ。粗製杯のI群に似た特徴をもつ。

蓋 (59~71) 杯Bまたは皿Bの蓋である。扁平で平坦な頂部から緩やかに口縁部が降る形態が多いが、63は器高が高く中心から緩やかに口縁部が降る形態である。62はつまみ頂部に「柔田」の墨書がある⁷⁾。69は板状のつまみを貼り付け、頂部に分割ヘラミガキを施す。赤褐色の色調を呈する。

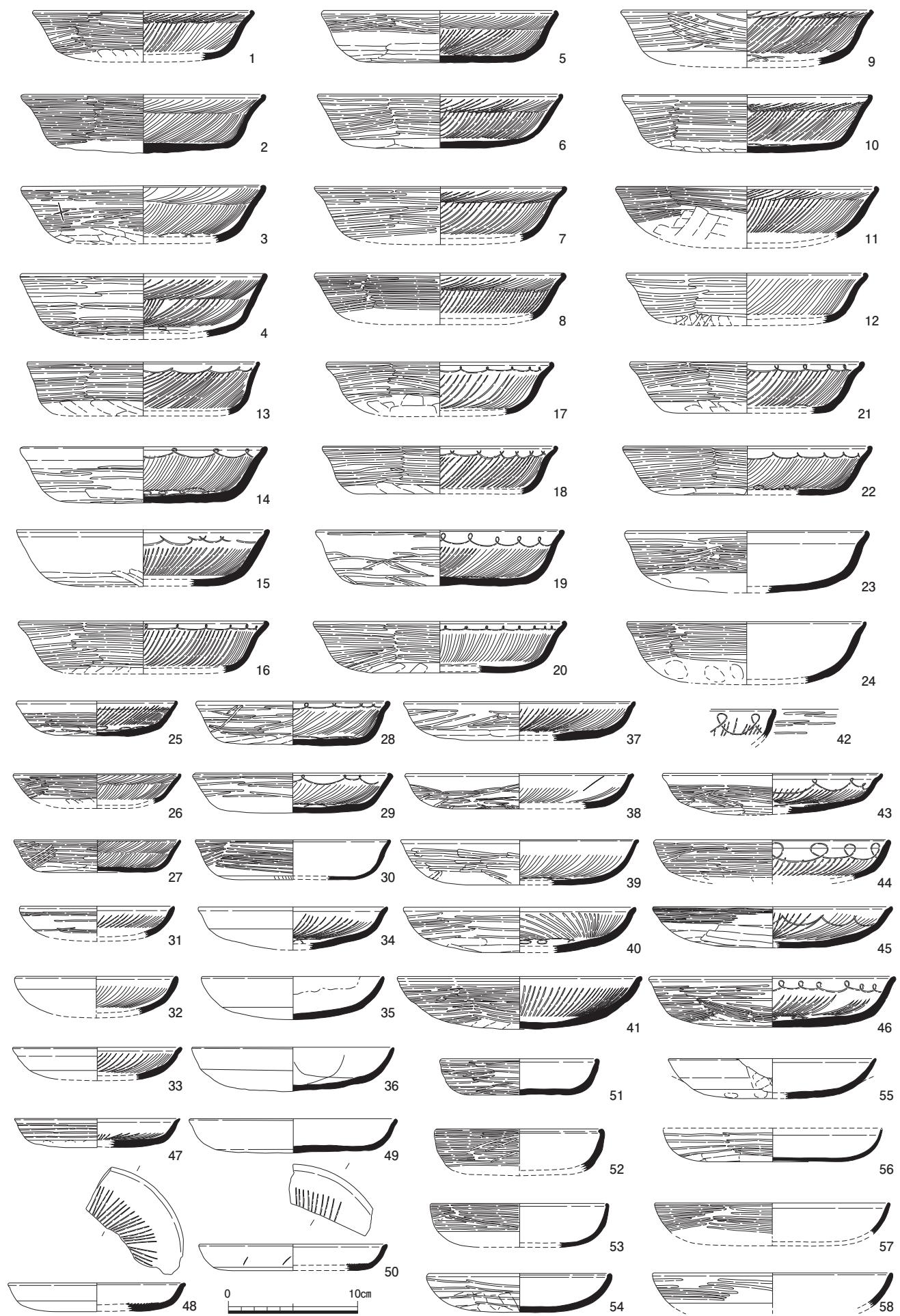


図327 SD8600出土土師器(1) 1:4

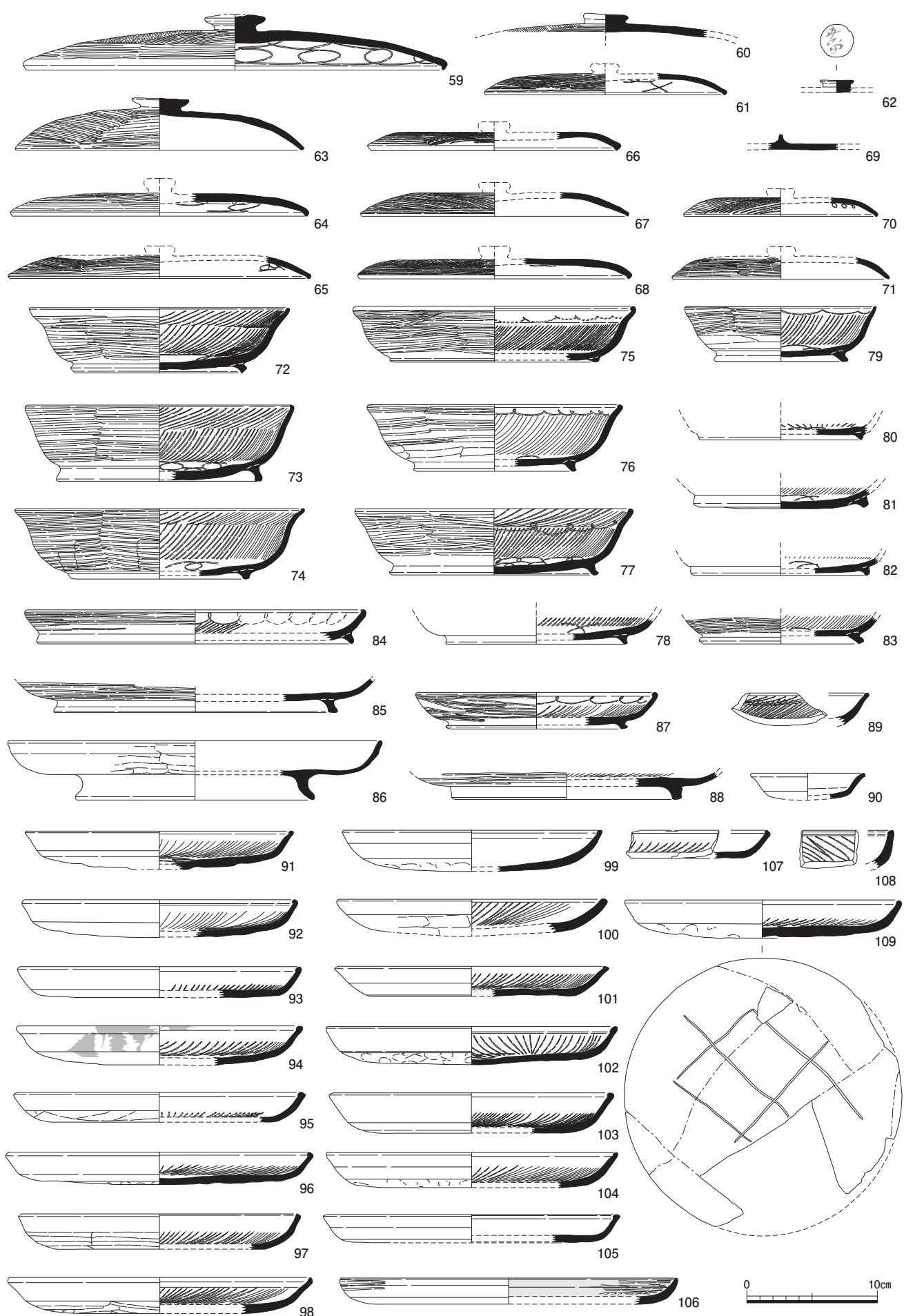


図328 SD8600出土土師器（2） 1:4

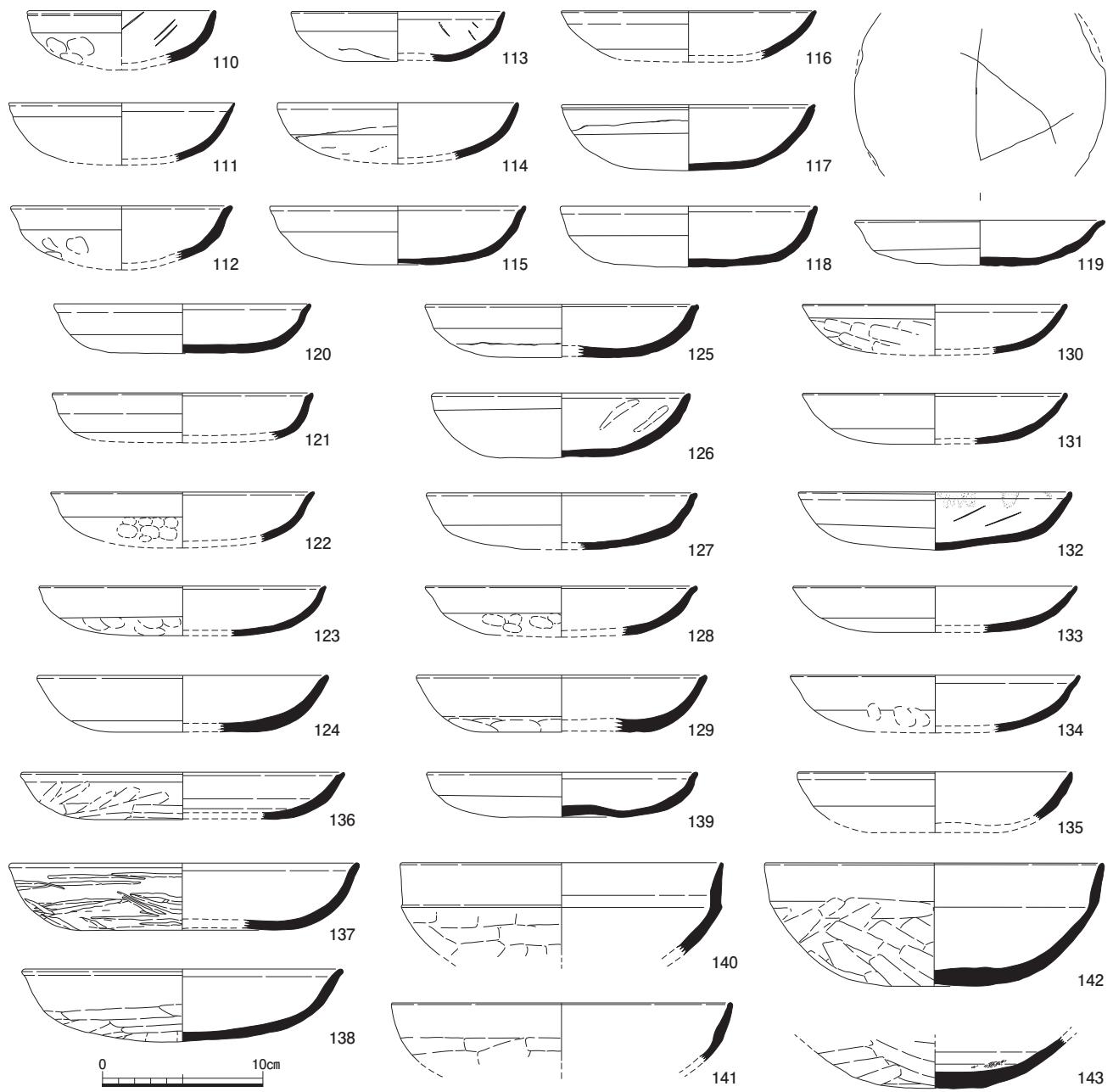


図329 SD8600出土土器(3) 1:4

鉢A (167・168) 平底の底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部にかけて内弯する。167は内面に二段放射暗文を施し、168は一段放射暗文を施す。

大型鉢 (169) 内底面に螺旋暗文、口縁部に放射状暗文と連弧暗文を施す。外面は口縁部に横方向のヘラミガキを施した後、体部下半に分割ヘラミガキを施す。

鉢H (140~143) 口径20~21cmで、底部外面にヘラケズリを施し、口縁部との境が屈曲し段がつく。

鉢X (165・166) 166は外面に粘土紐の巻き上げ痕跡が明瞭に残る。胎土に砂礫を多く含み、粗製杯のI群と似た特徴をもつ。165は手づくねで成形する。ミニチュア土器とみられる。

高杯A (157~164) 杯部内面の暗文構成をみると、螺旋暗文と二段放射暗文 (159)、螺旋暗文と二段放射暗文で上段と下段の放射暗文の間に連弧暗文 (160) とさらに

上段の上に連弧暗文を施す (157)、螺旋暗文と一段放射暗文と連弧暗文 (158) がある。脚柱部 (158・164) はいずれも心棒成形で、縦方向のヘラケズリを施し、断面八角形の面取りをおこなう。裾部は分割ヘラミガキを施し、162は内面にヘラケズリを施す。163はロクロ成形である。

盤A (170・171) 170は平底の底部から大きく外反する口縁部が立ち上がり、体部中位に四方向の把手を貼り付ける。内面はハケ調整の後、螺旋暗文と二段放射暗文を施し、上段と下段の間および上段に連弧暗文を施す。171は高台がつく形態である。

壺A (146~156) いずれも肩が張る形態で、体部上位に把手がつく。外面に分割ヘラミガキを施す。146・149には直立する口縁部の外面に縦方向のヘラミガキを施し、156には斜方向のヘラミガキを施す。把手 (151・152) は側面を折り返す特徴があり、いずれも貼り付け手

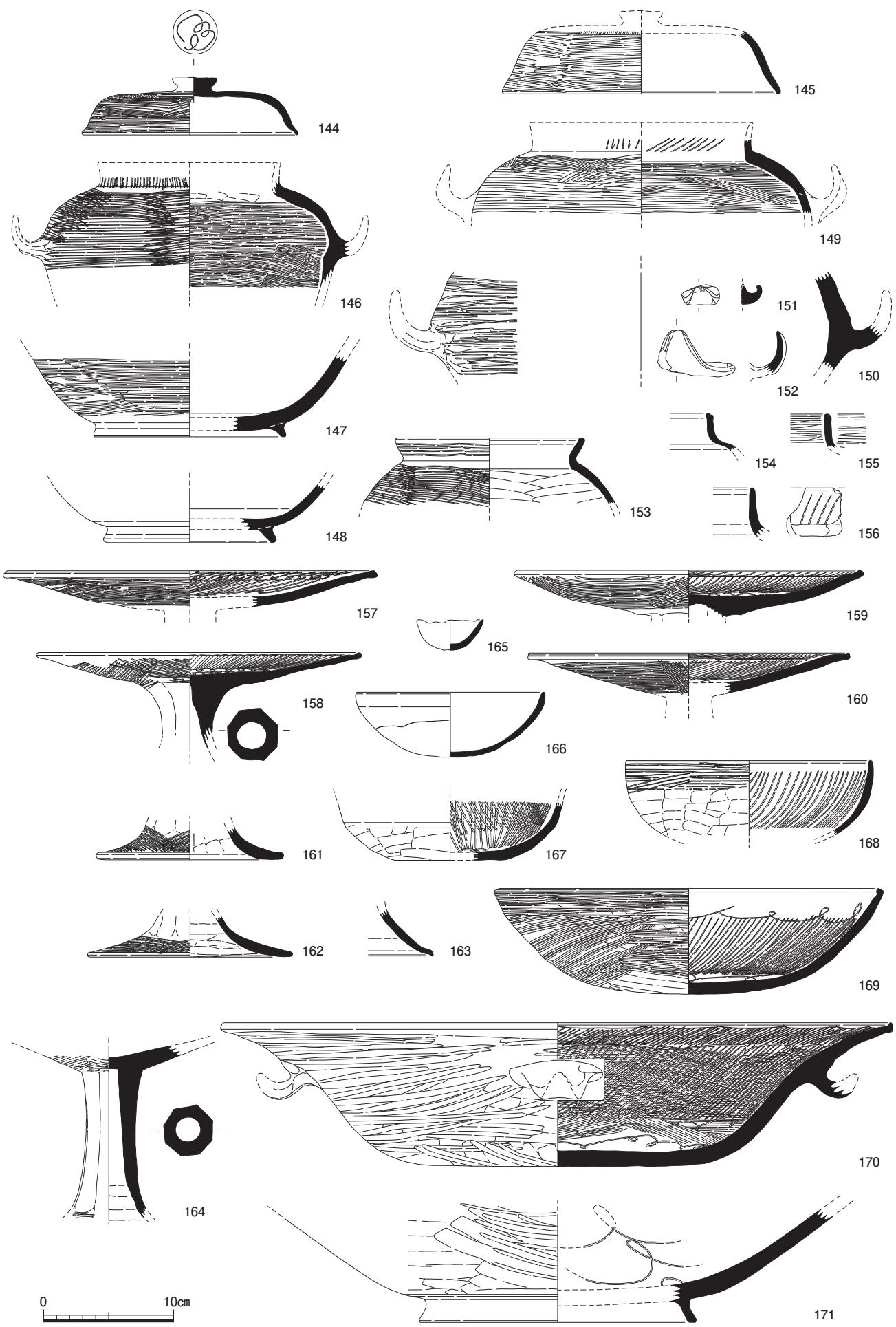


図330 SD8600出土土師器(4) 1:4

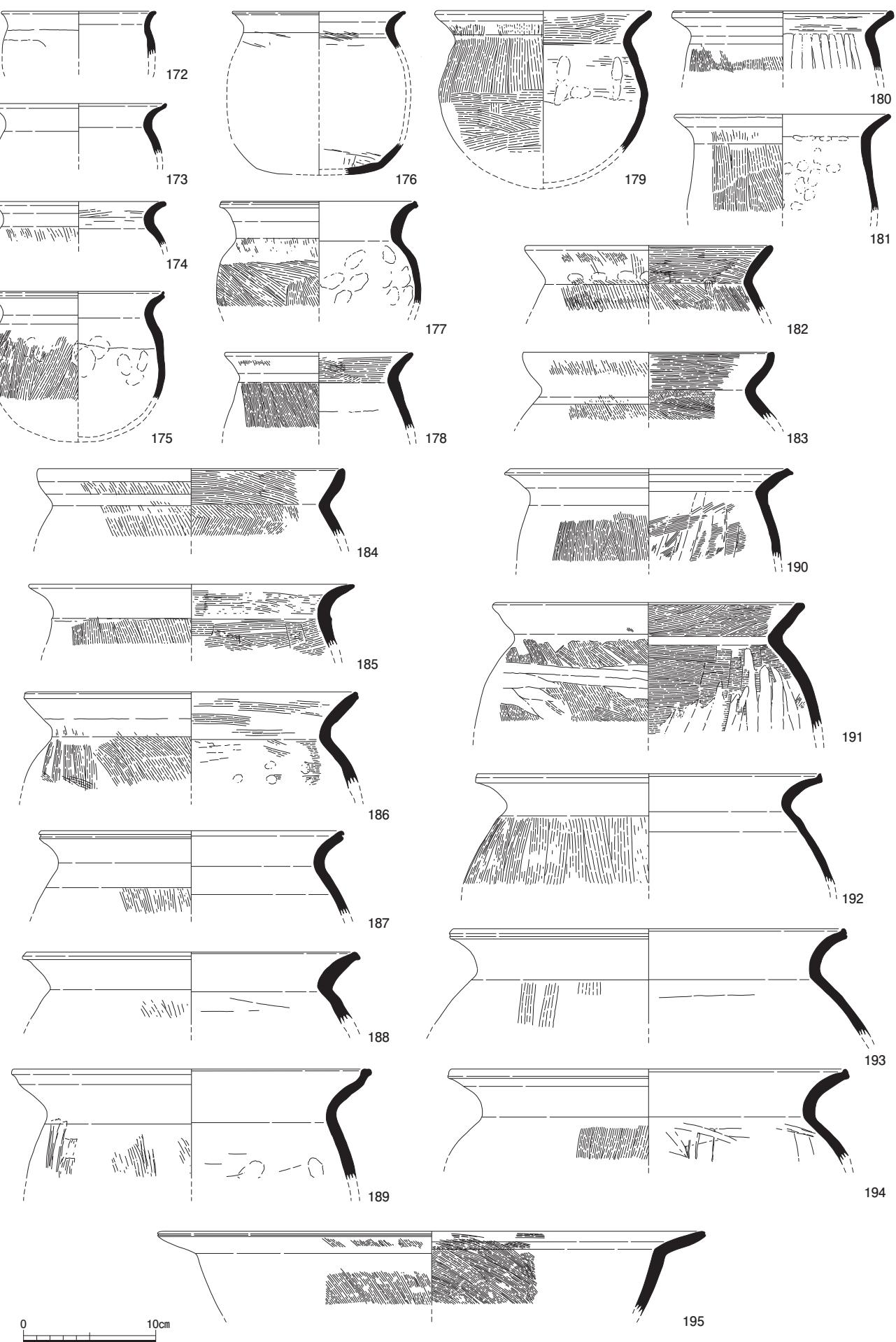


図331 SD8600出土土師器（5） 1:4

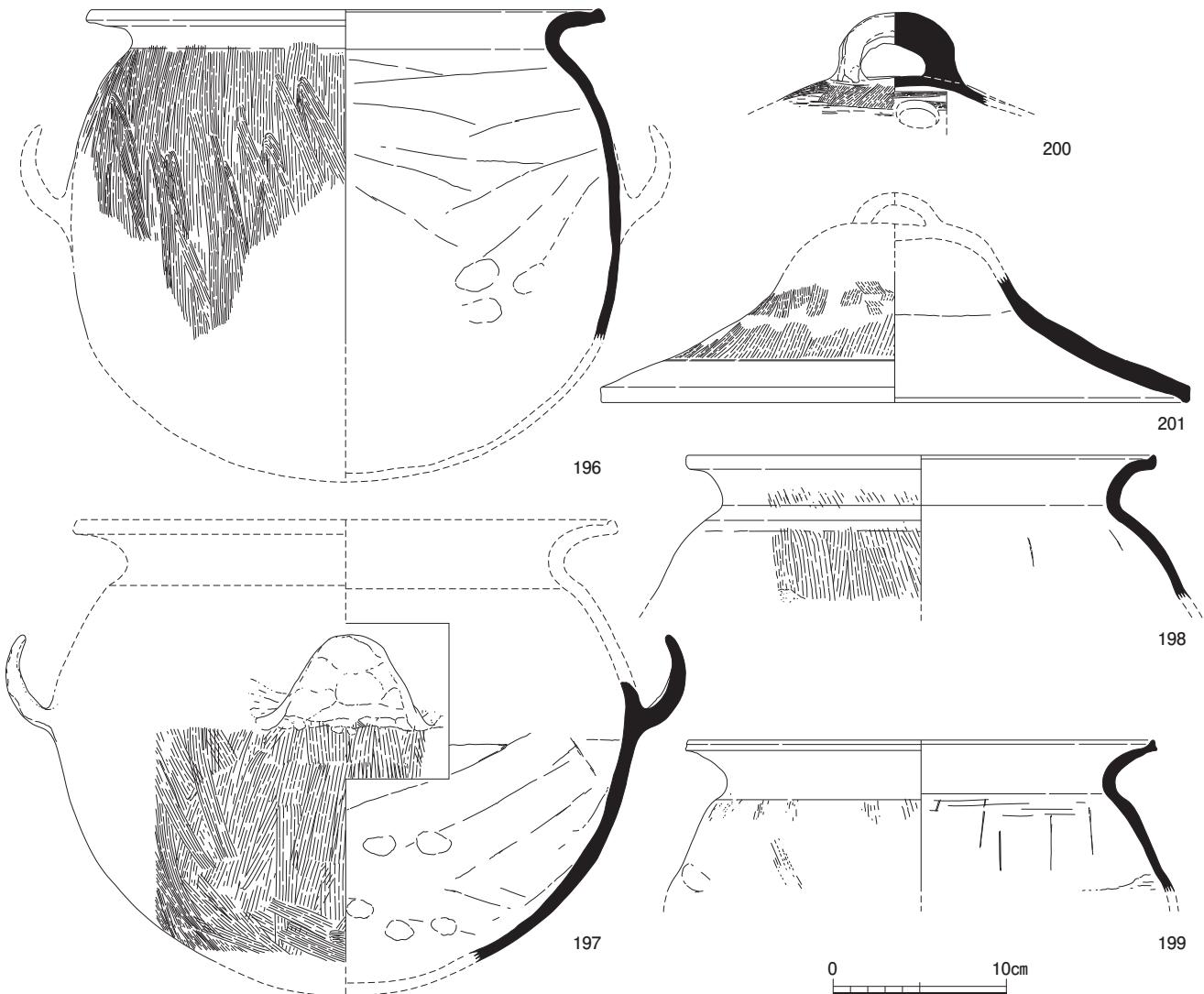


図332 SD8600出土土師器(6) 1:4

法である。また小型の把手片(151)から、小型の壺Aも存在していたことがわかる。153は肩部が張らず、球胴形態となる。口縁部外面に横方向のヘラミガキを施す。

壺A蓋(144・145) 杯Aを反転した形態を呈し、頂部に分割ヘラミガキを施す。

甕(172~194・196~199) 大・中・小の法量分化がみられる。また、球胴形態の甕A、把手が付く甕B(196~199)、長胴形態の甕C(189)に分かれる。製作技法と口縁部・頸部・胴部の形態からa~eの5群に分類する⁸⁾。
 a(175・177・187~189・192~194・196~199)：外面上位に縦方向のハケ調整、内面に無文當て具を使用しナデ調整で仕上げる。口縁端部に強い横ナデを施す。b(172~174・176)：外面上位に縦方向のハケ調整、内面をナデ調整で仕上げ、口縁端部を丸くおさめる。c(182~186)：内外面に斜め方向のハケ調整を施し、口縁部が受け口状もしくは口縁部外面中位に膨らみをもつ。d(190・191)：外面上位に細かいハケ調整を施し、内面に縦方向のヘラケズリを施す。口縁端部を上方に屈曲させると、外傾する面をもつものがある。e：a~dに属さない。a・b群は從

来大和a型、都城型と呼ばれていた一群である。c群は近江型と呼ばれ、南山城・大和北部地域を中心には分布する一群である。d群は河内型や伊勢型とされる一群である。数量的にはa群を中心とし、c群がそれに次ぐほか、多様な甕が存在する。また、これらの甕はいずれも外面にススが付着しており、使用後に廃棄されている。

鍋(195) 大型の鍋。内外面に斜め方向のハケ調整を施し、甕分類のc群と同様の特徴をもつ。

大型蓋(200・201) 内面にナデ調整、外面上位にハケ調整を施す。200は半環状の把手を貼り付け、円孔をあける。

須恵器

須恵器は土師器に比較して少ない。また、供膳具類とともに甕Cが多量である点が特徴である。

陰刻唐草文杯蓋(202・203) 金属器を模倣した稜楕形態で焼成前のヘラ描きにより唐草文を陰刻する。蓋(202)は頂部が平坦で緩やかに口縁部が降り、端部が下方に屈曲する。頂部縁辺および口縁部縁辺に二条の沈線を巡らせ、蓋頂部には反時計回り方向、口縁部には時計回り方向の花唐草文をヘラ描きする。つまみ頂部にも一単位の

花唐草を描く。身(203)は口縁部の破片である。外反する口縁部と底部との境に稜をもつ。外面に花唐草文を描くが蓋に比してヘラ書きの線が太い。

杯A (242~251) 器高の高低および口径の大小の数種類の法量分化がみられる。246・249・250はヘラ切り後、ロクロケズリを施す。243は器壁が薄く、精良な胎土である。244・251は内面にススが付着し、灯明器として転用する。242は口縁端部が外反し、底部との境に丸みをもつ。器壁が厚く、軟質の焼成である。

杯B (227~241) 杯Aと同様、器高の高低および口径の大小の数種類の法量分化がみられる。231・235・239は尾張産の可能性がある。235は口縁部を打ち欠いたのちに灯明器として転用する。底部外面に「□〔麦カ〕坏」の墨書がある⁹⁾。241は底部外面にヘラ切りの痕跡がラセン状に残る。また228・230・231・234はススが付着しており、灯明器として転用する。

杯B蓋 (204~226) 口径の大小の法量分化がみられる。器高が低く扁平な形態が多い。また、器壁が薄く頂部か

ら口縁部にかけて傘形を呈する形態の一群(212・213・218)も少数存在し、213は尾張産の可能性がある。222は器壁が厚く、形骸化したかえりがある。205・208は頂部に沈線が一条巡る。208は尾張産の可能性がある。215は焼成前の刺突による一対の穿孔がある。210・218・220は内面に墨が付着し、転用硯である。213は灯明器として転用する。

皿A (252・254) 252は平底の底部から口縁部が緩やかに開き、254は丸底の底部から内弯気味に口縁部が立ち上がる。ともに底部外面にロクロケズリを施す。

皿C (253) 丸底の底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部上面に平坦な面をもつ。

皿B蓋 (255) 頂部が平坦で口縁部は緩やかに下方へ降る。頂部にロクロケズリを施す。

鉢A (271~274) 口径の大小の法量分化がみられる。271は口縁部と底部が接合しない2片を同一個体とみて図示した。底部は平底を呈する。

鉢F (276・277) 276は体部が直線的に外方へ広がり、口縁端部が外反する。内面下位に斜め方向のナデ調整を施す。277は底部に複数の貫通しない刺突を施す。

片口鉢 (275) 平底の底部から緩やかに内弯しながら体部が立ち上がる。口縁部に片口を作るナデ調整の痕跡が認められる。

高杯 (256) 脚部片で、ハの字状に裾が広がる脚部を底部内寄りに貼り付ける。

壺A (266・268・269) 266は小型で肩が張る形態である。268は肩が張る形態で外面上位に横方向のヘラミガキ、体部に分割ヘラミガキを施す。269は球胴形態を呈する。

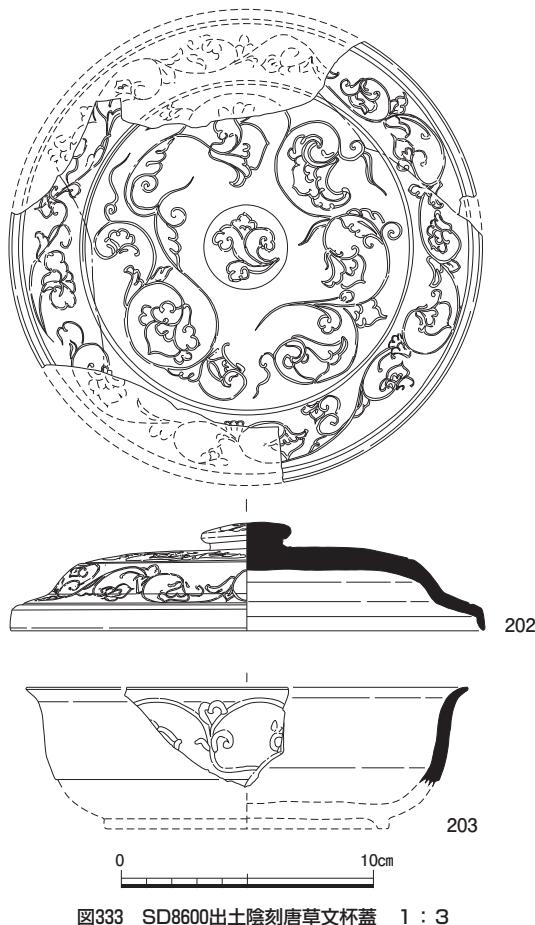
壺K (263) 頸部片で内面に絞り痕跡が残る。

壺X (258・264・270) 258は小型壺の体部片。264は外面に平行叩きの痕跡が明瞭に残る。270は口縁部のみで全形は不明。内面に自然釉が付着する。

壺蓋 (257・267) 257は瓶類の蓋か。器高が高く、つまみを欠損する。267は壺Aの蓋か。器高が低く、口縁端部が内傾する。

平瓶 (259~262) 口頸部片(259・260)と体部片(261・262)がある。261は内面に墨が付着する。

横瓶 (265) 頸部が外反し、口縁端部の上面に平坦面をもつ。内面に円盤閉塞の痕跡が残る。



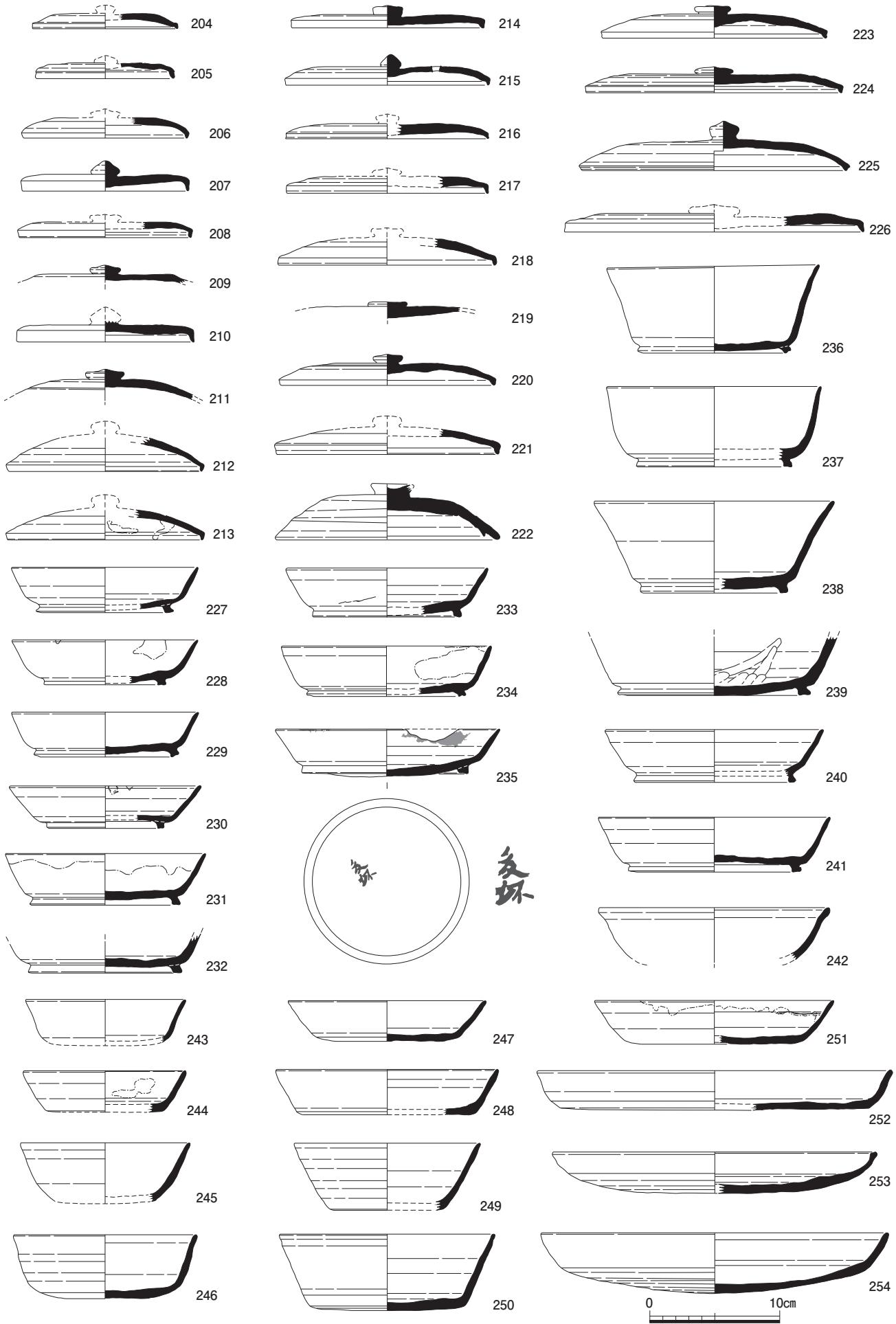


図334 SD8600出土須恵器(1) 1:4 (235の墨書きは1:2)

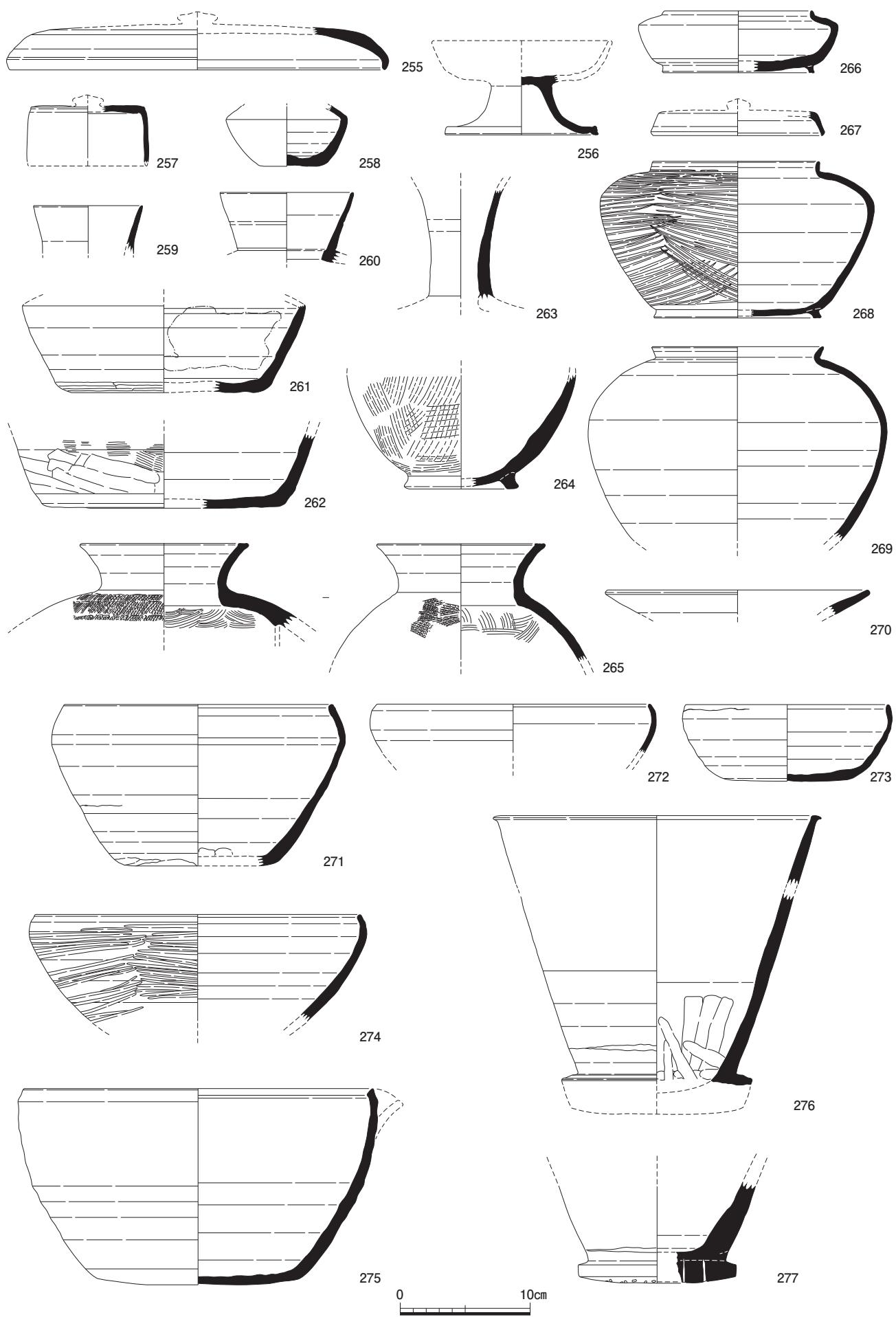


図335 SD8600出土須恵器(2) 1:4

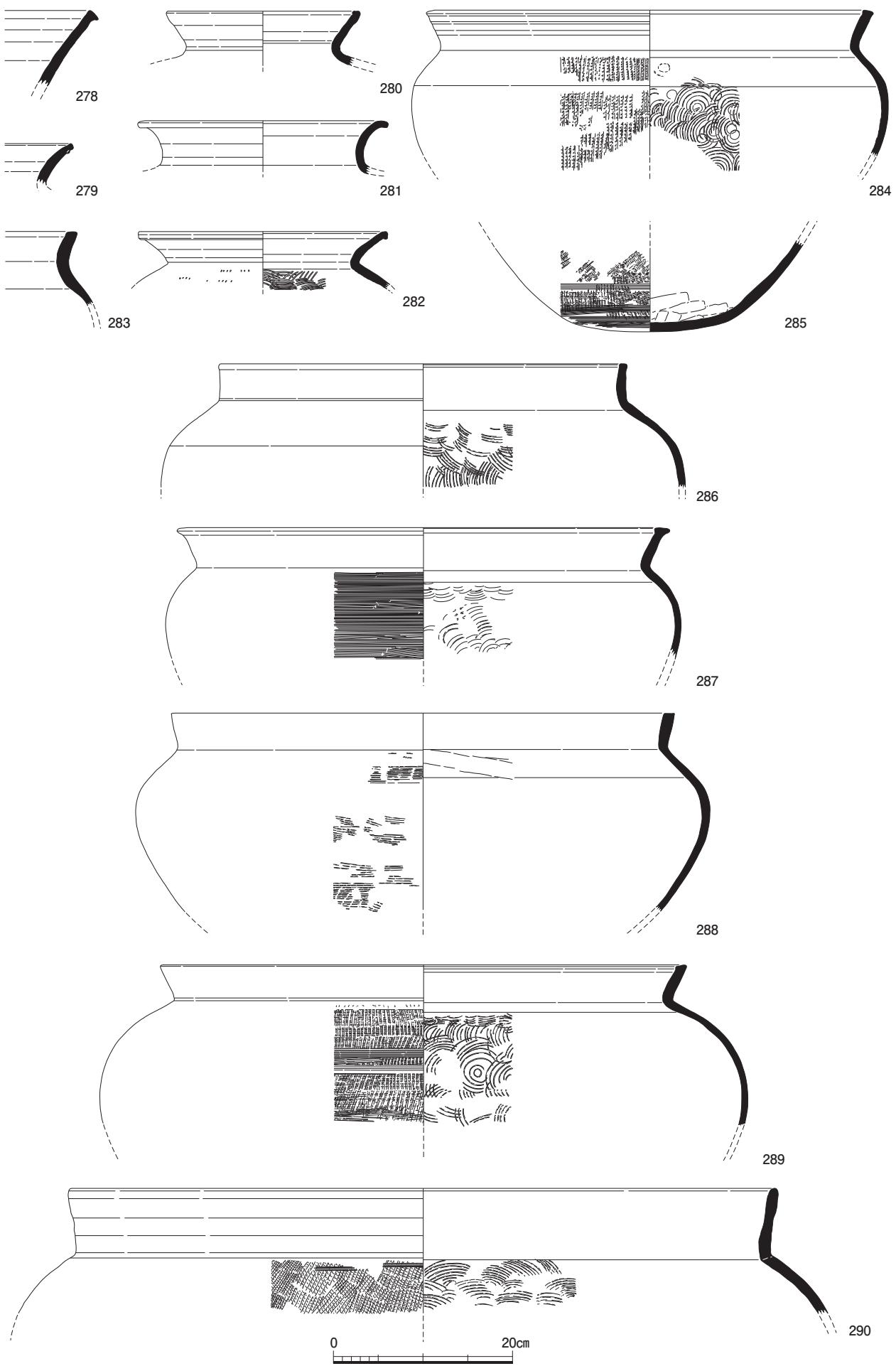


図336 SD8600出土須恵器(3) 1:6

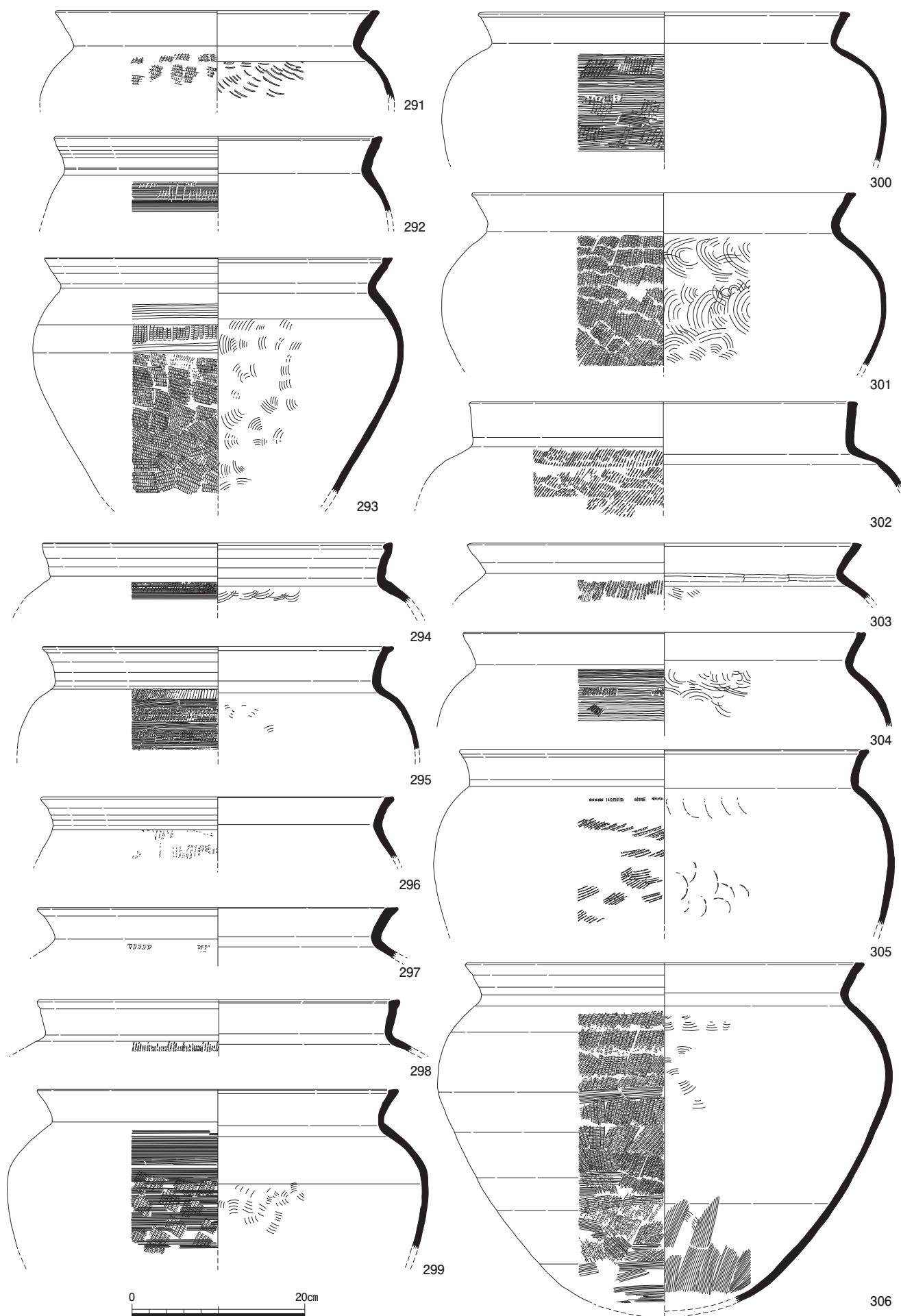


図337 SD8600出土須恵器(4) 1:6

甕A (278) 外面に2条の沈線を施す。内外面に黄土を塗布しており、尾張産の可能性が高い。

甕B (279～282) 279は口縁端部外面直下に突帯をもつ。280は口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部上面に面をもつ。281は口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。282は内面に白色の付着物がある。

甕C (283～306) 口径は45cm～60cmの範囲におさまるが、290はさらに大きい。最大径が胴部やや上位にある形態が多い。外面に叩き痕跡を残すが、その後数条の横ナデやカキメを施すものが多い傾向がある。口縁端部形態が多様である。

4 まとめ

本報告では、平城宮SD8600出土土器の概要を述べた。出土土器の特徴は以下の2点である。

奈良時代初頭の良好な土器群である SD8600は平城宮造営直後の基幹排水路であり、同溝からは和銅2年(709)～和銅8年(715)の記載がある木簡が出土している。SD8600出土土器は平城宮遷都直後の良好な土器群であり、奈良時代初頭の土器様相を考える上で重要な資料的価値をもつ。今後、時期的に前後する平城宮造営直前の下ツ道西側溝SD1900出土土器群や平城宮内の造酒司南北溝SD3035下層、大極殿院西辺整地土(木屑層・炭層)、平城京内の長屋王邸SD4750出土土器群などと比較検討をおこない、当該期の土器様相の特質をあきらかにする必要がある。

土器の由来が複数考えられる SD8600出土土器の組成をみると供膳具類、特に土師器供膳具の多さが特徴である。これは須恵器供膳具よりも土師器供膳具が多いとする平城宮内の特徴¹⁰⁾が奈良時代初頭においてもみられることを意味する。その一方で、須恵器甕Cや多様な粗製杯が多く出土している点が注目される。これらは、調査地近隣に位置する異なる性格をもった複数の空間で使用された器物が溝の埋め立てに際して廃棄されたものとみることができる。SD8600出土土器群の性格については、調査区周辺の遺構のあり方との有機的関連を考慮した上で評価する必要がある。

今後の検討課題 既に指摘されているとおり、土師器杯A・杯B・杯Cにみられる暗文構成と口縁端部形態が多様である。従来、杯Aの暗文構成は①→②→③の変

遷が推定されているが、SD8600出土杯Aをみると暗文構成の差異と形態・製作手法の差異に一定の相関がみられ、異なる型式が併存する同時期の系統差とみる見解¹¹⁾も首肯できる。上述の暗文構成の時期的変遷は、大枠としては妥当と考えられるが、その推移の過程や生産地・製作集団と供給先との関係性についてはさらなる検討が必要である。同様に粗製杯も生産地や製作集団が様々であったとみられ¹²⁾、さらなる検討が必要である。

また須恵器をみると、飛鳥時代後半の飛鳥地域中枢部で多くみられる東海産須恵器¹³⁾が、SD8600出土土器群の中では少量に留まる点が注意される。平城遷都に伴い、須恵器の供給体制が変化したことと考えられる。今後の検討課題である。

SD8600出土土器の土器様相とその歴史的背景については、今後も多角的な視点により、検討を進める必要がある。引き続き基準資料の再整理作業を進めたい。

(小田裕樹)

註

- 1) 川越俊一・渡邊淳子・西口壽生「平城宮土器大別の検討(1)」『紀要 2008』。川越俊一・西口壽生「平城宮土器大別の検討(2)」『紀要 2009』。
- 2) なお、前掲1) 川越ほか2008文献において各層出土土器の点数等が公表されているが、出土層位・位置の所見に若干の修正が必要である。大枠の変更は不要であるが、これらは『基準資料集』刊行の際に再提示したい。
- 3) 前掲1) 川越ほか2008文献。
- 4) 玉田芳英「椀C考」『文化財論叢 IV』奈文研、2012。
- 5) 奈文研『藤原京右京七条一坊西南坪』奈文研、1987。
- 6) 高橋透「藤原宮東面内濠SD2300出土土器(1)」『紀要 2012』。
- 7) 奈文研『墨書き土器集成 II』1989の191に該当する。
- 8) 土師器甕の分類は『紀要 2008』における整理作業時の渡邊淳子の分類を基礎としている。
- 9) 史料研究室の釈読による。
- 10) 玉田芳英「平城宮の土器」『古代の土器研究』古代の土器研究会、1990。
- 11) 前掲1) 川越ほか2008文献。
- 12) 前掲4) 玉田2012文献。
- 13) 尾野善裕・森川実・大澤正吾「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『紀要 2016』。